

(1) 「天地の造り主、全能の父なる神を信ず」

村上 伸

創世記 1 章 1 節-5 節
ヨハネによる福音書 1 章 1 節-5 節

先達での修養会の時に、上原教会の皆さんと大変良い話し合いができて感謝しておりますが、その折、礼拝の時に、例えば日本キリスト教団の信仰告白を告白するとか使徒信条を唱えるとか、そういうことがあるべきではないか、という意見が一方からでました。一方からはまた、それに対する一種の抵抗感のようなものも表明されまして、いったいこの問題についてはどうしたらよいのか、これからみんなで考えていこうということになりました。

しかし、そのものについて考える機会がないと判断もなかなか出て来ませんので、しばらく使徒信条についての連続の講解説教というような形で、考える折りを得たいと思っております。

使徒信条に関しては、たくさんの解説書があります。主だった神学者はたいていこの使徒信条について講義をしたり、それが本になったりしていますし、その多くは日本語に翻訳されてもいます。例えばカール・バルトのものとか、そのようなものが手に入ります。最近でも、若い学者が使徒信条を取り上げて書いています。これらは大変参考になるのですが、たいていは「我信ず」、「神を」、「全能の父」とか「天地の創造者」という風に細かく分けて、詳しく述べております。私もなるべく詳しく話す必要を一方では感じておりますが、しかしこれは講義ではありませんので、少し無理だと思えます。それで、特に最初のうちは割と大まかに区分して話してみたい。一番大事なことは、現代に生きる私たちが使徒信条というずいぶん古いものをどう受け止めることができるのか、もしもそこに大切なメッセージがあるとすれば、それは何なのか、そういうことに主眼を置いて、話したいと思っております。

それで今日は「天地の造り主、全能の父なる神を信ず」、普通第一項と呼ばれている「父なる神」に関するところについて、大まかにお話をしたいと思えます。来週は「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず」というところについて、そしてクリスマス当日は、「聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ」ということについてお話をするつもりです。それから順番に行きまして、できれば受難週の主日に「十字架につけられ」のところとうまく当たれば良いのですが、場合によっては前に戻るということも間にはさみながら進めたいと思っております。

さっき講義ではないと申しましたが、今後の展開のためにやはり最小限の説明はしておいた方が良いでしょうと思えますので、私は今日の説教の初めに、多少講義風になりますが、使徒信条というものがどういう風にして成り立ったか、どういう性質のものかということについて、お話をしておきたいと思えます。

使徒信条というのは、世界のキリスト教会が基本信条と呼んで大切に受け継いできたものの一つです。使徒信条の他に「ニカイア信条」というのがあります。これは325年のニカイアにおける公会議の時に決められたものです。それがいくらか修正されたり、補足されたりしたものが、「ニカイア・コンスタンチノポリス信条」(381年)です。当時ローマ帝国の首都でもあったあのコンスタンチノポリスで行われた公会議の席上で決められたものです。それから「カルケドン信条」というのがありまして、これは451年、北アフリカのカルケドンで行われた公会議の席上で決まりました。もう一つ「アタナシオス信条」というのがありまして、これは前のものとは性格が少し違いますが、アタナシオスという当時の教会の有力な指導者の名前を冠せられている信条です。420年以降に成立したであろうと考えられています。

「使徒信条」、「ニカイア信条」、「ニカイア・コンスタンチノポリス信条」、「カルケドン信条」、それに「アタナシオス信条」と、この五つを基本信条と呼んで、世界のキリスト教会は大変大切に受け継いできました。英語ではエキュメニカル・クリードといいまして、世界中の教会が共通して持っている信条という意味なのです。

しかし、本当に世界中の教会がそれを一致して認めているかといいますと、そういうわけでもなくて、例えば「ニカイア・コンスタンチノポリス信条」とか、「アタナシオス信条」の中には、後に東方教会、つまりギリシャ正教会との分裂の一番大きな原因になった言葉が入っているのです。それは聖霊が、父なる神と子なる神から出るという言葉です。「子からも」(filioque)という言葉が入っているために、聖霊とは父なる神から出る、子なる神からは出ないと主張する東方正教会はこれを認めません。後に11世紀に、このことが原因になって、ローマを中心とするローマ・カトリック教会と、コンスタンチノーブル(ビザンチン、今のイスタンブール)を中心とする東方正教会に分裂致します。ですから、東方教会は「ニカイア・コンスタンチノポリス信条」と「アタナシオス信条」を認めないのです。ローマ・カトリック教会と、そこから出てきたプロテスタント教会がこの五つの信条を基本的な信条として認めています。

ジュネーブに本部がある「世界教会協議会」(WCC)という大きな組織がありますが、このWCCの正式なメンバーとして東方正教会も加わっております。世界的な会議の時に礼拝をして、皆が一緒に信仰告白をするという段になるとちょっと困るわけなのですが、東方教会は「使徒信条」ならよいと認めているのです。ですから使徒信条というものはカトリックもオーソドックスもプロテスタントも一緒に唱えることができる、もっとも共通した性格が強い信条です。このことは私たちの教会にとってもなかなか大事なことだと思います。全世界の教会が共通の告白をすることができるということは、これからの世界では大変大事な要素です。その意味で「エキュメニカル」という言葉をよく使いますけれども、使徒信条は最もエキュメニカルな信条です。まずこのことを申し上げておきます。

もう一つ使徒信条に関する説明として是非申し上げておきたいことがあります。それは、他の信条はキリスト論をめぐる論争の中で召集された公会議の席で議論されて、比

較的短期間に決定されたものです。ニカイアは325年、ニカイア・コンスタンチノポリスは381年という風に成立の年代がはっきりしております。ところが使徒信条は違う。一番古い形で現れたのが多分2世紀の半ば頃だろうと考えられています。それからいろんな議論を経て、8世紀ごろまでの間に今のような形にだんだんとまとまってきたのです。ずいぶん長い時間がかかっているのですね。8世紀までには大体のところは固まっていたのですが、最終的に公会議の決定でそれが認められたのは、16世紀の半ば以降ということです。つまり、長い歴史の流れの中で、いろいろな討議を経て決められたものなのです。

この点も、私たちにとっては大事なことではないでしょうか。公会議で決められたニカイアなどの場合には、皇帝がかなり介入しておりますから、本当に教会の決定であったかどうかということにつきましては、異議をはさむ人もいます。それに比べて、使徒信条は長い間にみがかれてきたという性格のものですから、これは私たちの形成途上にある教会にとってはふさわしいと思います。以上、必要最小限の説明を踏まえた上で、少し先へいきたいと思います。

私たちの信仰の先達、古代から中世にかけてのキリスト教徒たちとその指導者たちが、一体、この使徒信条をまとめあげていく段階で何を考え、こういう言葉で何を告白したのか、そういう問題です。メッセージとして何が私たちに伝えられているのか。

大ざっぱなところから先に申し上げますと、使徒信条の中にはすでにある形式があって、そのことがある内容をはっきりと示していると、私は考えています。使徒信条の全体を眺めると、三つの部分に分かれていることがおわかりになると思います。

最初は「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」という部分ですね。次は「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によって宿り、処女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に下り、三日めに死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて生けるものと死ねるものとを審きたまわん。」ここまでです。この第二番目の部分、第二項と普通言いますが、これはいわば「子なる神」に関する告白ですね。最後は聖霊に関するところで、ここを第三項と呼んでおります。「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン。」

そうしますと、使徒信条の全体は三位一体的な構造を持っている。三位一体の神、「父なる神」、「子なる神」、「聖霊なる神」を彼らは信じていて、それをこういう形で言い表している。このことは非常にはっきりしています。そのことが一つです。

同様に形式的なことをもうひとつ申し上げますと、第二項のイエス・キリストに関する部分は質量的に圧倒的に多いということです。これは非常に際立った特徴です。これは一体何を意味しているのか、つまり、この信条をまとめあげていった人たちは、抽象的な神の概念から出発して考えたのではなくて、あのイエス・キリストという人物、あの方

がどういう風に生きられたのか、どういう風に死なれたか、そのことから圧倒的な印象を受けている、そういうことでしょう。それをこのような言葉で言い表している。そうするとどうしてもこの部分が大きくなるわけですね。それがどういう印象であったかということについては、いずれ詳しく話しますが、ひとまず彼らはイエスを通して神を知った、と言えると思います。使徒信条の形式からして、この二つのことははっきりと分かると思います。

そこで今日は第一項について、大ざっぱに見ておきたいと思います。「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」先程から断っておりますように、あんまり細かい説明は今日のこの説教の中ではできません。しかし、私がここから聞き取ったメッセージについて話しておきたいと思います。

神が天地の造り主であるという、そのことがまず最初に出てきます。これは単に天地万物の成り立ちについての信仰的な説明とか、解釈とか、そういうことではないでしょう。さっき創世記とヨハネによる福音書の最初の部分を読みましたが、ああいうところに示されている聖書の創造論というのは、自然科学が私たちに教えている進化論と矛盾するという議論が最近盛んです。アメリカでは、一方に進化論は聖書の信仰に矛盾するものだから学校では教えてはいけないと主張する人たちがいて、現にそれが裁判ざたになった州があるくらいです。もちろん、逆の立場もある。進化論か、創造論か、という対立は昔からあります。

進化論がすべて正しいわけではない。今は最近の自然科学的な研究に基づいて、進化論そのものも少しずつ修正されていくという段階ですけれども、しかしいずれにせよ、創世記に書いてあることが本当か、進化論で言っていることが本当か、という議論が私たちの世界に今あります。「我は天地の造り主なる神を信ず」という告白は、科学的なものの考え方をまったく否定して聖書に書いてある信仰を受け入れることだという人もあるわけです。

しかし、これはそういうことではありません。進化論と張り合って、この天地の成り立ちについて信仰的な立場から説明を与えているのだということではないのです。もちろん、そういう意味も全然ないわけではないでしょうが、私はこの「天地の造り主なる神を信ず」という告白は、第一義的には「神の愛を信ずる」という告白だと考えます。それはどういうことでしょうか。

神は、ただ一人で存在することも可能だったでしょう。しかし神はそれを望みませんでした。天地万物、人間も勿論その中に含まれますけれども、御自分とは全く違うものがそこに御自分と向き合って存在するというのを神は望まれた。神とは違う天地万物、あるいは人間、それが存在することを神は望んだということです。神が天地万物を造りたもうたというのは、そういうことです。

そうすると、その神とは違うものは一この場合は人間に集中して考えたいと思いますが一自分たちに備わっている自由意思に従って歩き始めるかもしれない。いや、きっとそうなるだろう。それが分かっているながら、神はなおそれが存在することを望んだということです。これは「愛」であります。

若い方々と話している時に、よく私はこういう質問を受けます。神がもし私たちを創造したのならば、罪を犯さないものとして造られたら良かったのに、こういう弱い存在としてではなく、強い意志を持ち、決して罪を犯さないものとしてお造りになったら良かったのに、と。何故神はそういうことをしなかったのかという、そういう質問です。

しかし、ここが大事な点だと思いますが、神は人間を神の操り人形のようなものとして造ったのではありませんでした。自由な意志を持ち、主体的に決断する。そういう人格として造られたのであって、人形を造られたのではありません。自由な意志を持ち、主体的に決断する人格であれと神は願って人間を造った、これは「愛」です。

私たち人間は他のものを愛します。親は勿論子どもを愛します。しかし私たちの愛は、しばしば子どもに対する支配に変わります。親の目標とか理想とか、そういうものに子どもを無理やりに従わせる、そしてそれが愛だと錯覚する。そういう錯覚に基づいて愛ということを行っています。男女間の愛でも同じことです。そこに人間の愛の悲しい限界がありますが、しかし神の愛はそうではありません。ご自分とは違う、独立の存在を望みます。仮にそれが自分にそむくことになるという可能性を含んでいても、その造られた人間が自由な意志を持ち、主体的に決断する人格であることを神は望みます。神の愛とはそういうものです。

その意味では「父なる神」という言い方にある重要な意味があると森本あんり氏が言っています。私はなるほどと思って読んだのですが、彼が書いた使徒信条に関する本の中に、こういう文章がありました。「この反抗の可能性を自らに引き受けるという意味では、父は母よりもふさわしいメタファー、いろいろな言い方ができるが、父なる神の方が母なる神よりもふさわしい」。最近フェミニズムの論点がだんだんはっきりしてきました、その中で「父なる神」という言い方の中には父権社会の影響が濃厚に現れているという反発が強くなっているということを私たちは知っています。しかしこの森本氏の書いているところを読んでいて、私はなる程、そういうこともあるかもしれないと今考え中なのですが、彼はこの父と子の断絶は私たちの生活の中にも非常に根源的なものとしてあるというのです。子どもは父親に反抗して、そこから独立していく。母親と子どもの関係は、そういう形では現れない。深層心理学でも「オイディプス・コンプレックス」といいます。あるいは文学のテーマとなって盛んにそれが取り上げられます。ツルゲーネフの「父と子」という作品がありますし、日本では志賀直哉の「暗夜行路」がそうです。父と子の関係、争い、そして断絶、そして子が父から離れていく。ある意味では生物学的にも説明できるような性格を、父と子の関係は持っています。聖書でも例えばイサクとヤコブ物語、あるいはヤコブと息子たち、そういった形で取り上げられている。そう考えると、これは当たっているかもしれない、と私は考えているところです。

とにかく神は反抗の可能性をあえて認めた上で人間を造った。それほどにその人間の主体性、独立した人格を認めておられるのです。これは愛ではないでしょうか。

神が天地万物をお造りになったというのは、自分とは違う、自分とははっきり区別される現実がご自分の前に存在することを望まれたということです。それは愛だと私は思

う。そしてその愛において、神は全能です。

「全能」とは何でもかんでもできるという単純な意味ではありません。我々が神にそむいている時にも、神は我々を捨てずに忍耐することができる、我々が神にそむいている時にも、やがて時が来るのを神は待つことができる、我々が神からそむいている時でも、神は我々を約束の相手として選んだというその契約に対してあくまでも忠実であることができる。どんな時にも愛し通すことができる。これが全能です。何でもかんでもできるということとは違います。とことん造られたものを愛するというその点において神は全能です。従って「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」というこの告白は、抽象的に頭の中で考えたような理屈から生まれた言葉ではないと思います。ご自分とは全く違うものが、ご自分と向き合って自由な主体として存在することを望まれた神。そして、それとあくまでも関わり続けようとする神。その神の愛への感謝に満ちた賛美、告白です。これがこの告白の中に込められている。そう私は思います。

そして、全体に先立って、「我は信ず」(クレド)という言葉が引きしめている。多くの方が指摘していることですが、先程挙げたニカイア信条とかニカイア・コンスタンチノポリス信条、カルケドン信条、アタナシオス信条などは、「我々は信ず」となっている。それにも意味があります。しかしこの使徒信条だけは「我は信ず」と一人称単数で始まっています。これは、一人一人が主体的に告白するということがなければ、信条というものは成り立たない、ということのしるしでしょう。一人一人が主体的に、自分の言葉として「私は信じます」という告白をする。使徒信条はそこから始まっています。しかし、それが同時に共同体の告白になっていく。一人一人が主体的に告白することと、教会全体が共同体として告白するということがつながっていく。そういう風にならなければいけないと思いますね。信条というのはそういうものだと思います。極めて主体的な、一人一人が「我信ず」と単数でいう面と、しかしそれが皆の共通の告白になっていくという両方がこの中で結びついている、と言えるのではないのでしょうか。

今日の説教は、「講義ではない」と断ったにもかかわらず、講義風な展開になりましたが、最初はこれでご勘弁頂きたいと思います。そして先程申しましたような予定に従いまして、今度は少し掘り下げるような形で、話を進めて行きたいと思っております。

(日本基督教団みくに伝道所 1996年12月8日 礼拝説教)